

ファッション・パフォーマンス

in 和光大学



ファッション・パフォーマンス ～アジア各地の布を使って～

& ディスカッション 開催

和光大生もモデルとして参加

今回のパフォーマンスに際して事前に説明会を行い、モデル希望の学生を募り集まってもらった。モデルスタッフとしてプロ・学生合同で、ファッションの中の差別や抑圧を表現するためのインドネシア舞踊を取り入れた振り付けや場面構成に合わせてポーズをとるなどの練習をした。初めのうちは慣れない動作に「歩くだけでも大変!!」といった言葉が聞かれた。計4回に渡る練習を休日返上で重ねて、とうとう本番を迎えた。



モデルも交えての熱心なディスカッション

去る10月18日、ジェンダーフリースペース・異文化交流室・表象研究会の共催によるファッションパフォーマンス&ディスカッションをJホールにて開催しました。衣服についての「固定概念」や「不自由さ」に焦点を当てて、自由な身体とファッションを目指しました。

ジェンダーフリースペース通信 創刊号
GENDER FREE
PRESS

〒195-8585

東京都町田市金井町2160

和光大学G112(G棟1階)

044-989-7777 内4112

www.wako.ac.jp/gender/



深町玲さんプロデュースによるパフォーマンス

本番そして懇親会

第一部 パフォーマンス(演出 深町玲)

アジア各地の布やお面、インドネシアの踊りを取り入れるなど独特なもの。机を退かした特設ステージを音楽に合わせて所狭しと動き回っていた。

第二部 ディスカッション(司会 堀田碧)

パフォーマンスを見て感じたこと、TPOによってどのように衣服を変えているかなど、服が自分を演出する一方で、様々な秩序を再生産している点が話された。

その後、場所をジェンダーフリースペースに移しての懇親会は、出演者・スタッフ・観客らがともに感想を分かち合う交流の場となった。

◇ 7月17日 ◇

植村洋 【ビートルズが歌った女の子男の子】

ビートルズの男の子たちは、女の子にひたすら求愛します。いろんなレトリックをして、女の子を口説きます。フラレそうになると泣きながら「捨てないで」と哀願し女の子を何とか自分の元に引きとめておこうと躍起になります。女の子たちははじめは寡黙でした。「キミを抱きしめたい」とか「ぼくを好きだって言ってみよ」と言われても、黙っていました。心臓の鼓動をダンスホールいっぱい響かせて近づいてきた男の子に手を握られても、伏し目がちにうなずくだけ。が、やがて嘘をつくようになる。「一緒にいるとウザッタイの」と逃げ隠れするようになる。すると男も負けずに八つ当たりする、つけまわす、脅す(あつちの国にもビートルズの昔から、泣く男もストーカーもキレル男もいるのです)ビートルズの女の子と男の子達をこのよくな振る舞いへと動機付けていたのは何だったのでしょうか。あの時代の文化のありようを参照しつつ読み解いてみました。



◇ 10月2日 ◇

加藤三由紀 【映画『初恋のきた道』】

半世紀ほど昔の中国の西北部、質朴な暮らしを営む村に、青年教師が街からやって来た。村一番のべつびんさんが彼に一目惚れ、恋して恋してついに結ばれる。その二人の息子が、父の葬式のために帰郷し、幼いころから伝え聞いた父母の恋物語を語る。美しい風景に美しい心、まずはそんなファンタジーの中国に感動。そして、「初恋を貫けるなんて素敵」「村の女の子の途な想いが伝わった」、という感想から始めて、「中国の男性は、ああいう女性が理想なの?」「観客は誰?もしかしたら、やさしく尽くしてくれる架空の女性を夢見る日本むけ?」「男優さん、ミスキヤストじゃない?」「恋人を追いかけてばかりで、働いてなのかな?」「主人公、おばあさんになったら、ちっとも魅力ないね」「夫が死んだら自分の人生も終わり、みたくていやだ」等々、疑問もかなり出されました。牧歌的な涙を誘う映画でしたが、一途な恋いの果てには素敵なおばあさんについてほしかった、おばあさんが素敵に撮れなかったのは張藝謀の大きなミス、岸恵子のようなおばあさんだったら、

私もうっかり感動していたかもしれせん。

◇ 10月16日 ◇

吉川信 【映画『クライングゲーム』】

今回の映画の主人公は、ナショナルリストの中でもとりわけ過激な、IRA Provisionalの兵士です。つまり、現在の南北分裂状態のアイルランドを、根本的には認めない、という立場の過激派です。演じたのはステイヴン・レイという名優で、同じニール・ジョーダン監督の『マイケル・コリンズ』(96年ベネチアのグランプリ作品)ではプロイ警部を演じていました。祖国を取り戻すことを使命としたくないテロリストは、それまできつとハードボイルドな生き方をしてきたのでしようけれど、そんな「男らしさ」の世界に生きる人間が、いわゆるゲイの男に、一種の友情(と呼んでよいのか、あるいはこれも愛なのか)を抱く。単なる恋愛感情とは違う何か、テロリストの心の襞に生じるというのが、この映画の面白いところでしょう。

93年のアカデミー

賞脚本賞受賞作ですが、(大型チェーンの貸しビデオ屋は売れ筋のビデオしか置いていないようですから)見損なった方はできるだけ小さな店で探してみてください。



← ← ←

小倉遊亀展を訪れて

杉本紀子

8月20日から10月6日まで竹橋の国立近代美術館で開かれていた『小倉遊亀展』に行ってきた。絵を見るのは好きだが日本画にはあまり詳しくないので、日本画家の展覧会にはあまり足を運ぼうという気にはならないのだが、小倉遊亀の絵だけは別である。

何かの雑誌に一枚掲載されていたのを見たのが最初だと思うが、それが人物画だったのかそれとも静物画だったのかも今となってはもう思い出せない。その絵の醸し出す伸びやかな雰囲気魅せられたのだと思う。以来、東京で展覧会があると暇があれば出かけていくことにしている。小倉遊亀が105歳で亡くなった2000年だったかにも三越で個展があった。その時も見に行つたのだが、今回にも増して盛況だった。私と同じくらいの中年、初老の女性が圧倒的に多かった。

絵画展は得てそんなものだが、それにしても同世代の同性に熱烈に支持されているのは、小倉遊亀の絵から受ける「女性賛歌」が、男性画家の描くコケティッシュなあるいはソティスフイケートされた女性美とは全く異なっており、女性の生き方そのものを肯定的に捉えた人生の一齣一齣がそこに描き出されているからであろう。男性の目を意識した女性ではなくて、そこに見る女性一人一人の人生が投影されているのを共感をもって、そして多少自己肯定的に、追体験できるからであろう。女性の逞しさと天真爛漫な自信が小倉さんの絵から迸っている。マチスと比較される大胆な構図、人物を立体的に描く斬新さ、色使いの巧みさ、こういった絵画技法の思い切りのよさも私が小倉さんに惹かれる理由なのであるが、ひとつだけ不満ともつかない不満がある。なるほど女性は見る者を勇気づけるように描かれてはいるのだが、女性が共に人生を歩んでいるはずの男性はどうかという点と、1958年ごろの「家族像」にわずかに現れるだけで、後は、宗教的な題材に多少描かれるだけである。もちろん、画家のテーマがそれぞれ特化したものとしてあることは認めるが、小倉さんの人物画から私の読みとるテーマが「女性の人生」だとしたら、人生は女性ひとりでは抽出せない。日本の女性たちが男を相手にせず、ひとりて人生を背負ってきた側面は否定できないにしても、「家族像」に見られる視点がもう少し前面に出いてくれたらなあ、というのが私の微かな憾みである。



『O夫人坐像』(1953)小倉遊亀

「すぎもと のりこ・表現文化学科」

◇ 11月27日 ◇

杉本紀子【ボルノ映画を見てみよう！】
ボルノというのは大体が男性の性欲を掻き立てる・なだめるためのものだとすると、それを女性が見たらどう見えるのか。その中にある男女差別や社会の規制はどのようなものか一緒に考えてみました。

世話人からのメッセージ

半谷俊彦(経済学科)

ジェンダー問題については以前から関心を持っていたものの、これまでは取り組む機会に恵まれませんでした。ジェンダーフリー・スペースが本格的に始動することを機に、勉強を始めようと思いい立ち、参加させていただいた次第です。

専攻は財政学で、国や地方自治体がどのようにお金を集め、どのように使うべきかを研究します。この分野でも、①主婦がパートで所得を得ると夫の税金が増える、②妻が定職を持つと年金の分が悪くなる、③同じ家事労働でも自分の家庭内で行う場合と家政婦として行う場合では課税上の取扱いが異なる、などの問題が、婚姻や女性の労働に影響を与えると議論されています。このような視点からジェンダー問題に取り組んでいけたら、と考えています。

海外情報

第1回 ハワイ大学の女性センター 井上輝子

ホノルルにあるハワイ大学マノア校にある4階建ての学生サービスセンターの2階に、女性センターがある。各種リーフレットの並ぶ入口を入り、コンピュータに向かう学生たちの横を抜けると、レスビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーのための学生活動室、センター長の部屋、学生たちに開放された、くつろいだ雰囲気のリウンジが2室、参考図書のある資料室などが並ぶ広い空間から成っている。

女性センターが出来たのは、アメリカでは後発の1991年のこと。学内でセクシュアル・ハラスメント事件が起きたのを機に、ハワイ州女性議員団と大学の女子学生、女性職員、教授団らが共同して設置したという。フルタイムのセンター長、パートタイムの職員1名のほか、複数の学生スタッフが毎日交替で勤務している。



学生たちが、誰にも知られずに必要な情報を持っていけるように、スタッフは多様なチラシ類を置いた入口から少し離れた場所で仕事をしている。

クリステイヌ・クエルメル所長の話では、センターの主たる活動は、性暴力やセクシュアル・ハラスメント防止のためのリーフレット発行、ワークシヨップ開催等の啓蒙活動と、女性や性的マイノリティのための情報・資料の提供にある。性暴力やセクシュアル・ハラスメントについては、相談者をカウンセラーや関係団体に橋渡しするインテイクの役割を果たしている。利用者の4分の1から3分の1は男性だという。誰でも気軽に覗ける、気楽さと自由がこのセンターの特徴だ。

「このうえ、てるこ人間関係学科」

◆DVサバイバーのお話を聞く会◆

原田恵理子(本学非常勤講師)他

DV(ドメスティック・バイオレンス)というのは、夫や恋人などのような「親密な」関係にある男性が女性にふるう暴力・虐待のことです。

2001年10月に日本でも「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律(DV防止法)」が成立し、社会の関心が高まっています。

今回はDVの被害を受けた女性たち(DVサバイバー)をお招きし、DVサポートセンターの活動や、DVの実態・影響など具体的なお話を伺いました。参加者達は意外に身近な問題であることに気が付き、熱心な質疑応答がありました。

本棚から

『ドメスティック・バイオレンス防止法』
戒能民江編著 尚学社 2001年

DV防止法が2001年10月から施行されています。本書は、この法律の内容と実施の実情、法律の問題点などを、詳しくかつわかりやすく解説した本です。「DVは女性に対する暴力であり性別である」との明確な視点に立って、実効あるDV防止法への提言もな



されています。DV問題を考える際の必読書といえます。ジェンダーフリースペースには、本書以外にも、DVについて知るための図書・ビデオなどの資料がありますので、ぜひ活用してください。



11月15日 ジェンダーフリースペースにおいて